

# モミの木

ハンス・クリスチャン・アンデルセン Hans Christian Andersen

矢崎源九郎訳

青空文庫



町はずれの森の中に、かわいいモミの木が一本、立っていました。そこはとてもすてきな場所で、お日さまもよくあたり、空気もじゅうぶんにありました。まわりには、もっと大きな仲間の、モミの木やマツの木が、たくさん立っていました。

けれども、小さなモミの木は、ただもう、大きくなりたい、大きくなりたいと思って、じりじりしていました。そんなわけで、暖かなお日さまのことや、すがすがしい空気のことなんか、考えてもみなかったのです。農家の子供たちが、野イチゴやキイチゴをつみきて、そのへんを歩きまわっては、おしやべりしても、そんなことは気にもとめませんでした。子供たちは、イチゴをかごにいっぱいいっただり、野イチゴをわらにさしたりすると、よく、小さなモミの木のそばにすわって、言いました。

「ねえ、なんてちっちゃくて、かわいいんだろう！」

ところが、モミの木にしてみれば、そんなことは聞きたくもなかったのです。

つぎの年になると、モミの木は、長い芽だけ、一つ大きくなりました。またそのつぎの年になると、もっと長い芽だけ、また一つ大きくなりました。モミの木からは、毎年毎年新しい芽がでて、のびていきますから、その節ふしの数をかぞえれば、その木が幾いくつになった

かわかるのです。

「ああ、ぼくも、ほかの木とおんなじように、大きかったらなあ！」と、小さなモミの木はため息をつきました。「そうだったら、ぼくは、枝えだをうんとまわりにひろげて、てっぺんから広い世界をながめることができるんだ！ 鳥も、ぼくの枝のあいだに巣すをつくるだろうなあ！ 風が吹ふいてくりや、ぼくだって、ほかの木とおんなじように、じょうひんにうなづくこともできるんだがなあ！」

明るいお日さまの光も、鳥も、頭の上を朝に晩に流れてゆく赤い雲も、モミの木の心を、すこしもよろこばせてはくれませんでした。

そのうちに、冬になりました。あたりいちめん、キラキラがやくまっ白な雪が降りつりました。すると、ウサギが何度もとび出してきて、この小さな木の上をとびこえて行きました。——ああ、まったくいやになっちまう！——

でも、冬が二度すぎて、三度めの冬になると、この木もずいぶん大きくなりました。ですから、ウサギは、そのまわりを、まわって行かなければならなくなりました。ああ、大きくなる！ 大きくなって、年をとるんだ！ 世の中に、これほどすてきなことはありません、と、モミの木は思いました。

秋には、いつもきこりがやってきて、いちばん大きな木を二、三本、切り倒たおしました。これは、毎年毎年くり返されることです。いまではすっかり大きくなった、この若いモミの木は、それを見ると、ぶるぶるつとふるえましました。なにしろ、大きいりっぱな木が、メリメリポキツと、恐おそろしい音をたてて、地べたにたおれるんですからね。それから、枝が切り落されると、まるはだかになってしまつて、ひよろ長く見えました。こうなれば、もうもとの形なんか、ほとんどわからないくらいです。やがて、車にのせられて、それから、ウマにひかれて、森の外へ運ばれていってしまいました。

「いったい、どこへ行くのでしょうか？　そして、これからどうなるのでしょうか？」

春になつて、ツバメやコウノトリが飛んでくると、モミの木はたずねてみました。「あの木がみんな、どこへ連れていかれたか、あなたがた、知りませんか？　途とちゆう中で会いませんでしたか？」

ツバメは、なにも知りませんでした。しかし、コウノトリは、なにか考えこんでいるようでした。そして、やがてうなずきながら、こう言いました。「そうだ。きつと、こうだろうよ。ぼくがエジプトから飛んできたとき、新しい船にたくさん出会ったんだよ。船には、りっぱな帆ほししら柱があつたけど、きつと、それがそうだよ。モミのにおいもしていたし

ね。みんな、高く高くそびえていたよ！　これが、きみに教えられることさ！」

「ああ、海をこえていけるくらい、ぼくも大きかったらなあ！　その海つてのは、いったいどんなものですか？　どんなものに似ているんですか？」

「そいつを説明したら、とつても長くなっちゃうよ」コウノトリはこう言うと、むこうへ行つてしまいました。

「おまえの若さを楽しみなさい」と、お日さまがキラキラかがやきながら言いました。

「おまえの若々しい成長を、しあわせに思いなさい。おまえの中にある若い命を楽しみなさい」

すると、風はモミの木にキスをして、露はその上に涙をこぼしました。けれども、モミの木には、なんのことかさっぱりわかりませんでした。

クリスマスになると、ずいぶん若い木が、幾本も切りたおされました。その中には、ほんとに小さな若い木もあつて、このモミの木ほど大きくもなければ、年もそんなにちがわないものもありました。ところで、モミの木は、ちつとも落着いてはいられませぬ。やつぱり、どこかへ行きたくて、行きたくてならなかったのです。切られた若い木々は、どれもこれも、よりによつて、美しい木ばかりでした。そして、いつも枝をつけられ

たまま、車にのせられました。そして、馬にひかれて、森の外へ運ばれていってしまおうのです。

「みんなどこへ行くんだらう？」と、モミの木はたずねました。「ぼくより大きくもないのになあ。それに、ぼくよりずっと小さいのだからあつた。どうして、みんな枝をつけたままなんだらう？　どこへ行くんだらう？」

「ぼくたちは知ってるよ。ぼくたちは知ってるよ」と、スズメたちがさえずりました。

「ぼくたちはね、むこうの町で、窓からのぞいたんだよ。みんなどこへ連れていかれたか、ぼくたちは知ってるよ！　とつてもとつてもりっぱに、きれいになっていたよ。ぼくたち窓からのぞいてみたんだもの。あつたかい部屋のまんなかに植えられて、そりやあ、きれいなものでかざられていてね、金色にぬつたりリンゴや、ハチ蜜みつのはいったお菓子かしや、おもちゃや、それから、何百つていうろうそくで、きれいにかざられていたよ！」

「で、それから——？」と、モミの木は、枝という枝をふるわせて、聞きました。「それから？　ねえ、それからどうなったの？」

「それから先は、ぼくたち見なかったよ。だけど、くらべるものもないくらい、とつてもすてきだったよ！」

「ぼくも、そういうすばらしい道を進んでいくようになるだろうか？」と、モミの木は、うれしそうにさげびました。「海の上に行くよりも、このほうがずっといい！ ああ、たまらないや！ クリスマスだったらいいのになあ！ もうぼくだって、こんなに大きくなって、去年連れて行かれた木ぐらいになつてゐるんだもの！——ああ、早く車の上にのりたいなあ！ あつたかい部屋の中で、きれいに、りっぱになれたらなあ！

「だけど、それから——？ うん、それからは、もつといいことが、もつときれいなものがくるんだ。そうでなきや、ぼくを、そんなにきれいにかぎつてなんかくれやしないだろう。そうだ、もつと大きなことが、もつとすばらしいことがくるにちがいない——！ だけど、何だろう？ ああ、苦しい！ とてもたまらない！ この気持、自分でもよくわからないや」

「こうしてわたしがいるのを、よろこびなさい！」と、空気とお日さまが言いました。「この広い広いところで、おまえの若さを楽しみなさい！」

しかし、モミの木は、すこしもよろこびませんでした。でも、ずんずん大きくなつていきました。冬も夏も、みどりの色をしていました。こいみどりの色をして、立っていたのです。人々はモミの木を見ると、「こりやあ、きれいな木だ！」と、言いました。

クリスマスになると、どの木よりもまつききに切りたおされました。おのが、からだのしんまで、深くくいりりました。モミの木は、うめき声をあげて、地べたにたおれました。からだがいなくていたくて、気が遠くなりそうでした。とても、しあわせなどとは思えません。かえって、生れ故郷をはなれ、大きくなったこの場所からわかれてゆくのが、悲しくなりました。もうこれつきり、大好きな、なつかしいお友だちや、まわりの小さなやぶや、花にも会うことができないんだ、そればかりか、きつともう鳥にも会えないんだろう、と、モミの木は思いました。こうして、旅に出かけるということは、楽しいものではありませんでした。

モミの木は、どこかの中庭について、ほかの木といっしょに車から下ろされたとき、はじめ、われにかえりました。ちょうどそのとき、そばで人の声がしました。「これがりっぱだ！　ほかのは、いらないよ」

そこへ制服を着た召使めしつかいが、ふたりやつてきて、モミの木を、大きな美しい広間の中へ運びこみました。まわりのかべには、肖像画しょうぞうががかかっています。大きな中国の花瓶かびんがありました。大きなストーブのそばには、ライオンのふたのついている、大きな中国の花瓶かびんがありました。それから、ゆり椅子いすや、絹張りのソファや、大きなテーブルもありました。テーブルの上

には、絵本やおもちやがいっぱいありました。それは、百ターレルの百倍ぐらいもするものでした。——すくなくとも、子供たちは、そう言っていました。

モミの木は、砂のつまった、大きなたるの中に立てられました。でも、それがたるであるとは、だれの目にも見えませんでした。というのは、そのたるのまわりには、みどり色の布がかけられていましたし、おまけに、色とりどりの、大きなじゅうたんの上に置かれていましたから。

ああ、モミの木は、うれしくて、どんなにふるえたことでしょうか！ それにしても、これから、いつたい、どうなるのでしょうか？

召使とお嬢じょうさんがきて、モミの木をきれいにかぎってくれました。枝の上には、色紙を切りぬいてこしらえた、小さな網あみの袋ふくろがかけられました。見れば、どの袋にも、あまいお菓子がつまっています。それから、金色にぬったリングや、クルミがさげられましたが、それらは、まるで、そこになつているようでした。そして、赤や青や白の小さなろうそくが、百以上も、枝のあいだにしっかりとつけられました。ほんとの人間にそっくりのお人形が——モミの木は、いままでに、こんなものを見たことがありませんでした——みどりの枝のあいだでゆれていました。木のいちばんてっぺんには、金箔きんぱくをつけた、大きな星

が一つ、かざられました。それはほんとうに美しく、まったくくらべものもないくらいりっぱなものでした。

「今夜ね」と、みんなは言いました。「今夜は、光りかがやくよ！」

「ああ！」と、モミの木は思いました。「早く、夜になればいいなあ！ 早く、ろうそくに火がつけばいいなあ！ でも、それから、どうなるんだろう？ 森から、ほかの木がここへやってきて、ぼくを見てくれるんだろうか？ スズメが、窓ガラスのところへとんでくるだろうか？ ぼくは、しっかりとここに生はえていて、冬も夏も、きれいにかざられているんだろうか？」

まったく、モミの木が、こんなふうと思うのも、わりはありません。しかし、あんまりいろいろなことを、あこがれて考えるものだから、木の皮が、ひどく痛みはじめました。木の皮が痛むというのは、わたしたち人間にとって頭がずきずきするのと同じことです。木にしてみれば、じつにつらいことなのです。

やがて、ろうそくに火がともされました。なんとというか、やきでしよう！ なんとという美しさでしょう！ モミの木は、うれしくてうれしくて、枝という枝をふるわせました。すると、ろうそくの一本にみどりの葉がさわって、火がついてしまいました。そのため、

すつかりこげてしまいました。

「あら、たいへん！」と、お嬢さんたちはさげんで、いそいで火を消しました。

モミの木は、もう二度とからだをふるわせたりはしませんでした。ああ、まったくおそろしいことでした！ それに、自分のからだのおかざりが、なになくなりはしないかと、それはそれは心配でした。そして、あたりがあんまり明るいので、すつかりぼんやりしてしまいました。――

と、そのとき、入り口のドアが、さつと両側に開かれました。それといっしょに、子供たちのむれが、モミの木をひつくりかえそうとするような勢いで、どつと、部屋の中へとびこんできました。おとなたちは、そのあとからゆつくりとはいってきました。小さな子供たちは、じつとだまりこんで、立っていました。――しかし、それもほんのちよつとの間で、すぐまた、あたりに鳴りひびくほど、うれしそうな声を出して、はしやぎました。そして、木のまわりを踊りながら、贈り物おくものを一つ、また一つと、つかみとりました。

「この子たちは、何をしようっていうんだろう？」と、モミの木は考えました。「どんなことが起るんだろう？」やがて、ろうそくは小さくなって、枝のところまで燃えてきました。こうして、だんだん小さくなつてくると、順々に火が消されました。それから、子供

たちは、木についているものを何でもぎ取っていいという、おゆるしをもらいました。うわあ、子供たちは、モミの木めがけて突進とっしんしてくるではありませんか。さあ、たいへん。どの枝もどの枝も、みしみしなります。もしも木のでつぺんと金の星どが、天井てんじょうにしつかりと結びつけられてなかったなら、モミの木は、きつと、たおされてしまったことでしょう。

子供たちは、きれいなおもちゃを持って、踊りまわりました。もうだれひとり、木のほうなどを見るものはありません。ただ、年とつたばあやがきて、枝のあいだをのぞきこんでいました。でもそれは、イチジクカリangoの一つぐらい、忘れて、のこっついやしないかと、ながめていたのです。

「お話！ お話！」と、子供たちは大声に言いながら、ふとつた、小がらの人を、モミの木のほうへ引っぱってきました。その人は、木のま下に腰こしをおろして、「こりゃあ、緑の森の中の中にいるようだね」と、言いました。「これじゃ、この木が、いちばんとくをするというものだ。だが、わたしは一つしかお話をしあげないよ。おまえたちは、イヴェデ・アヴェエデのお話が聞きたいかね？ それとも、階段からころがり落ちたのに、王さまになつて、お姫ひめさまをもらった、クルンベ・ダウンベのお話が聞きたいかね？」

「イヴェデ・アヴェエデ！」と、さけぶ者もあれば、「クルンベ・ダウンベ！」と、さけびたてる者もありました。がやがやとさわぎたてて、いやもう、まったくたいへんでした。ただ、モミの木だけは、だまりこんでいました。心の中では、「ぼくは仲間じゃないんだらうか？ 何かすることはないんだらうか？」と、考えていました。もちろん、モミの木は仲間でした。しかも、自分のしなければならぬことは、もう、すましてしまっていたのです。

ところで、あの小がらの人は、階段からころがり落ちたのに、王さまになつて、お姫さまをもらった、クルンベ・ダウンベのお話をしました。すると、子供たちは、大よろこびで手をたたいて、「もつと話して！ もつと話して！」と、さけびました。子供たちは、イヴェデ・アヴェエデのお話も聞きたかったのです。でも、このときは、クルンベ・ダウンベのお話しか聞かせてもらえませんでした。

モミの木は、じつと黙り<sup>だま</sup>こんだまま、考えていました。森の中の鳥たちは、いままで一度だつて、こんなお話をしてくれたことはありません。「クルンベ・ダウンベは、階段からころがり落ちたのに、お姫さまをもらったんだ。うん、うん、世の中つて、そういうものなんだ」と、モミの木は考えて、このお話をした人は、あんなにいい人なんだから、き

つと、これはほんとうのことなんだ、と思いこんでしまいました。「そうだ、そうだ。ぼくだって、もしかしたら、階段からころがり落ちて、お姫さまをもらうようになるかもしれないんだ！」こうして、モミの木は、つぎの日も、ろうそくや、おもちゃや、金の紙や、くだもの果物などで、かぎってもらえるものと思つて、楽しみにしていました。

「あしたは、ぼくはふるえないぞ！」と、モミの木は心に思いました。「ぼくがきれいになつたところを見て、うんと楽しもう。あしたもまた、クルンベ・ダウンベのお話を聞くんだ。それから、イヴェデ・アヴェデのお話も、きつと聞けるだろう」こうして、モミの木は、一晚じゆう、じつと考えこんで立つていました。

あくる朝になると、下男と下女がはいつてきました。

「さあ、またかざりつけてくれるんだ！」と、モミの木は思いました。ところが、みんなは、モミの木を部屋の外へ引っぱり出して、階段を上り、とうとう、屋根裏部屋に持つていつてしまいました。そして、お日さまの光もさしてこない、うすぐらいすみっこに置いていきました。「こりやあ、いつたい、どういふことなんだ？」と、モミの木は考えました。「いつたい、こんなところで、何をさせようつていうんだろう？ それに、こんなところで、何が聞かせてもらえるんだろう？」

こうして、モミの木は、かべに寄りかかって立ったまま、いつまでもいつまでも考えつづけました。——時間はいくらでもありました。だって、そうしたまま、幾日も幾晩もいくにちすぎていったのですもの。だれも、上つてきませんでした。しかし、とうとう、だれかが上つてきました。でも、それは、大きな箱を二つ三つ、すみっこに置いたためだったので。おかげで、モミの木は、すっかりかくれてしまいました。このようすでは、モミの木のことなんか、みんなは忘れてしまったのでしよう。

「外は、いま冬なんだ」と、モミの木は考えました。「地面はかたくて、雪がつもっているものだから、ぼくを植えることができないんだ。だから、春になるまで、ぼくをここへ置いて、守っていてくれるんだ！ それにしても、なんて考え深いんだろう！ なんて、みんな親切なんだろう！——だけど、ここがこんなに暗くて、こんなにさびしくなけりやいいんだけど。——なにしろ、小ウサギ一ぴき、いないんだからなあ！——あの森の中は、楽しかったなあ！ 雪がつもると、ウサギがとび出してきたっけ。うん、そう、そう、そしてぼくの頭の上を、とびこえていったっけ。でもあのとときは、そんなことは、ちつともうれしくなかったんだ。そりゃあそうと、この屋根裏部屋はおつそろしいほどさびしいなあ！」

そのとき、小さなハツカネズミが一ぴき、チュウ、チュウ、鳴きながら、ちよろちよろ出てきました。そのあとから、小さいのがまた一ぴき、出てきました。二ひきのハツカネズミは、モミの木のそばへよつて、においをかいでいましたが、やがて枝のあいだへはいりこみました。

「とつても寒いわ!」と、小さなハツカネズミたちは言いました。「でも、ここは、ほんとはいいとこね。ねえ、お年よりのモミの木さん!」

「ぼくは年よりじやない!」と、モミの木は言いました。「ぼくなんかより、ずっと年とつたのがたくさんいるんだよ」

「あなたは、どこからきたの?」と、ハツカネズミたちがたずねました。「あなたは、どんなことを知っているの?」このハツカネズミたちは、ほんとに聞きたがりやでした。

「ねえ、世の中でいちばんきれいなところのお話をしてちょうだい。あなた、そういうところへ行つたことがあるの? こんなすてきな食べ物のあるお部屋へ行つたことはない?

チーズがたなにあつて、ハムが天井からさがつていて、あぶらろうそくの上で踊りがおどれて、おまけに、はいつていくときはやせていても、出てくるときはふとつている、ねえ、こんなすてきなお部屋はない?」

「そんなところは知らないね」と、モミの木は言いました。「だけど、森は知ってるよ。お日さまがキラキラかがやいて、鳥が歌をうたっている森のことならね」そして、小さい時のことを、のこらず話してきかせました。小さなハツカネズミたちは、いまままでにそんな話を聞いたことがなかったので、夢中むちゆうになって聞いていました。そして、「まあ、あなたは、ずいぶんいろんなことをごらんになったのね！　あなたは、なんてしあわせなんでしょう！」と、言いました。

「ぼくが？」と、モミの木は言つて、自分の話したことを考えてみました。「そうだ。あのころが、まったくのところ、ほんとに楽しい時だったんだ！」——それから、お菓子やろうそくでかぎってもらった、クリスマス前夜のことを話しました。

「まあ！」と、小さなハツカネズミたちは言いました。「あなたは、なんてしあわせなんでしょう、お年よりのモミの木さん！」

「ぼくは、年よりじやないつたら！」と、モミの木は言いました。「やっとこの冬、森から来たばかりなんだよ。ぼくは、いま、いちばん元気のいい年ごろなのさ。ただ、すこし大きくなりすぎたけどね」

「ほんとに、お話がお上手じょうずなこと！」と、ハツカネズミたちは言いました。つぎの晩に

は、ハツカネズミたちは、ほかに四ひきの仲間を連れて、モミの木の話を聞きにやってきました。モミの木は話をすればするほど、だんだん、なにもかも、はつきりと思い出してくるのです。そして、心の中でこう思いました。「それにしても、あのころは、まったく楽しい時だった。だけど、ああいう時が、また来るかもしれない。また来るかもしれないんだ！ クルンベ・ダウンベは、階段からころがり落ちたって、お姫さまをもらったじやないか。ぼくだって、もしかしたら、お姫さまをもらえるかもしれないんだ」

そうして、モミの木は、あの森の中に生はえていた、小さな、かわいらしいシラカバの木を思い出すのです。モミの木にとっては、そのシラカバの木は、ほんとうに美しいお姫さまのようだったのです。

「クルンベ・ダウンベっていうのは、だれ？」と、小さなハツカネズミたちがたずねました。そこで、モミの木は、その話をすっかり聞かせてやりました。モミの木は、一つ一つの言葉まで思い出すことができたのです。それを聞くと、小さなハツカネズミたちは、うれしくてたまらなくなつて、もうすこしで、モミの木のてっぺんまでとび上がるところでした。

そのつぎの晩になると、もつともつとたくさんのハツカネズミたちがきました。そして

日曜日には、二ひきのドブネズミまでもやってきました。ところが、そんな話はおもしろくなんかありやしない、と、ドブネズミたちは言うのです。そうすると、小さなハツカネズミたちも悲しくなりました。もう、前のようにおもしろいとは、思われなくなったのです。

「おまえさんは、その話がたつた一つしかできないのかね？」と、ドブネズミたちがたずねました。

「これ一つだけ！」と、モミの木は答えました。「その話は、ぼくがいちばんしあわせだった晩に聞いたんだよ。でもそのころは、ぼくがどんなにしあわせかってことを、思ってもみなかったんだ」

「じつにばかばかしい話だ！ おまえさんは、ベーコンとか、あぶらろうそくとかいうようなものの話は、なんにも知らないのかね？ 食物部屋の話なんかも知らないのかい？」  
「知らない」と、モミの木は言いました。

「ふん、じゃあ、ごめんよ」ドブネズミたちは、こう言うと、さっさと、自分たちの仲間のところへ帰ってしまいました。

そのうちに、小さなハツカネズミたちも、行ってしまったまま、とうとう、こなくなっ

てしまいました。モミの木はため息をついて、言いました。

「あのすばしつこい小さなハツカネズミたちが、ぼくのまわりにすわって、ぼくの話聞いてくれたときは、ほんとに楽しかったなあ！でも、それも、もうおしまいさ。——だけど、今度、ここから連れていってもらったら、忘れないで、楽しくなるようにしよう」

しかし、いつ、そうなったでしょう？——そうです。ある朝のことでした。人々が上つてきて、屋根裏部屋の中をかきまわしはじめました。とうとう箱が動かされて、モミの木が引っぱり出されました。モミの木は、ちよつと荒つぽく床に投げだされましたが、すぐに下男が、お日さまの照っている、階段の方へ引きずっていききました。

「さあ、またぼくの人生がはじまるんだ！」と、モミの木は思いました。モミの木は、すがすがしい空気と、お日さまの光をからだに感じました。——このときは、もう、おもての中庭にいたのです。なにもかも、すっかり変わっていました。モミの木は、自分自身をながめることを、まるで忘れてしまって、思わず、まわりのいろいろなものに見とれてしまいました。

この中庭は花園はなぞののとなりにありましたが、見れば花園では、いろいろな花が今をさかりと、咲きみだれていました。バラの花は低い垣かきの上にたれ下がって、すがすがしい、よ

いにおいを放っていました。ボダイジュの花も、いま、まつさかりでした。ツバメがあたりを飛びまわって、「パイチク！　パイチク！　あたしの夫がきましたわ！」と、うたっていました。けれども、それは、モミの木のことでありませんでした。

「さあ、これから生きるんだ！」と、モミの木は、うれしそうに大きな声を出しました。そして、枝をうんとひろげてみました。ところが、なんとということでしょう。枝はみんな、かれてしまつて、黄色くなつていのです。モミの木は、雑草やイラクサの生えている、すみつこのほうに横になっていました。金の紙でつくった星が、まだてっぺんについていて、明るいお日さまの光を受けて、キラキラかがやいていました。

中庭では、元氣そうな子供たちが二、三人、あそんでいました。それは、クリスマスするとき、モミの木のまわりを踊つて、あんなによろこんでいた、子供たちだったのです。その中のいちばん小さな子が走つてきて、金の星をむしり取つてしまいました。

「ねえ、こんなきたない、古ぼけたクリスマスツリーに、まだこんなものがついてたよ！」  
こう言いながら、その子は、枝をふみつけました。靴の下で、枝がポキポキ鳴りました。

モミの木は、花園に咲きみだれている美しい花、いきいきとした花をながめました。それから、自分自身の姿を振りかえつてみて、いつそのこと、あの屋根裏部屋の、うす暗い

すみっこにいたほうが良かったです。そして、森の中ですごした若かったころのこと、楽しかったクリスマス前夜のこと、クルンベ・ドウンベのお話を、あんなによろこんで聞いていた、小さなハツカネズミたちのことなどを、つきつきに思い出すのでした。

「おしまいだ、おしまいだ！」と、かわいいそうなモミの木は、言いました。「楽しめるときに、楽しんでおけばよかつたなあ！ おしまいだ、おしまいだ！」

そのとき、下男がやってきて、モミの木を、小さく切りわってしまいました。こうして、まきのたばができあがりました。やがて、モミの木は、お酒をつくる大きなおかまの下で、まっかに燃え上がりました。モミの木は、深く深くため息をつきました。そして、ため息をつくたびに、なにか、パン、パン、と、小さくはじけるような音がしました。それを聞きつけると、あそんでいた子供たちがかけこんできて、火の前にすわりました。そして、中をのぞいて、「ピッフ！ パッフ！」と、大声にさげびました。

モミの木は、深いため息をついてパチパチ音をたてるたびに、森の中の夏の日のことや、キラキラとお星さまのかがやく冬の夜のことを、思い出すのでした。それから、クリスマス前夜のことを、また人から聞かせてもらって、自分も話すことのできた、たった一つの

お話、クルンベ・ドウンベのことを、思い浮<sup>うか</sup>べるのでした。——こうしているうちに、とうとう、モミの木は、燃えきってしまいました。

それからまた、男の子たちは、中庭であそびました。見ると、いちばん小さな男の子は、胸に金の星をつけていました。それは、モミの木がいちばんしあわせだった晩に、つけてもらったものです。でも、今は、それもおしまいです。そして、モミの木も、おしまいです。それからは、それから、このお話もおしまいです。みんなおしまい、おしまい。お話というものは、みんな、こんなふうにおしまいになるものですよ。

# 青空文庫情報

底本：「人魚の姫 アンデルセン童話集※」[#ローマ数字1、1-13-21] 新潮文庫、新潮社

1967 (昭和42) 年12月10日発行

1989 (平成1元) 年11月15日34刷改版

2011 (平成23) 年9月5日48刷

入力：チエコ

校正：木下聡

2019年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# モミの木

ハンス・クリスチャン・アンデルセン Hans Christian Andersen

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

著者 矢崎源九郎訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>